第一章　早くからの漢字教育は子供の能力を大きく伸ばす

――私の漢字教育実践記――

■漢字はかなより覚え易い

「漢字はかなよりも覚え易い」などとは、私だってそれまでは夢にも考へたことかありませんでした。それは、昭和二十八年、一年生を担任して、文部省が決めた学習漢字の十倍に当る量の漢字を子供たちに教へてみて初めて判(わか)った事です。

誰もがさう思ってゐたやうに、私も「漢字は覚え難いものに決ってゐる」と思ってゐました。ただ私は“学校”といふ漢字が一年生にとってどんなに難しいものであっても、社会では決して使用されることの無い“がっこう”といふ表記で教へるのは間違ってゐるのでは無いか」と考へてゐたものですから、教科書のかな書きの言葉を片っ端から漢字表記に変へて教へて行きました。

社会では“がっこう”といふ表記は絶対に使ひません。新聞の記事に“がっこう”といふ表記は絶対に使ひません。また、“がっこう”といふ表記の看板を掲げてゐる学校は、一つだって見付けることは出来ないでせう。これでは、折角(せっかく)努力して覚えた“がっこう”は、社会の役には全く立たない、といふことになります。

いや、役に立たないだけならまだ良いのです。“がっこう”と覚えた事が、次の“学校”といふ漢字の学習を困難にしてゐることが、後の実験で証明されたのです。今まで(今でもさうです)漢字の学習がうまく行かなかったのには、「漢字で表記すべき言葉でも、初めは必ずかな表記で学習させる」といふ事が原因になってゐたのです。然し、その事が確かめられたのは、この時から三年後の事になります。

「どんなに学習が困難であるとしても、学習して社会の役に立つものを教へるのが教育といふものでは無いだらうか」「難しいからと言って、その代りに易しいものを教へるといふ事は、いかにも子供の為(ため)を思ひ遣(や)っての計らひのやうであるけれども、社会の役

に立たないものを教へられたのでは、逆に子供には不幸なのでは無いだらうか」

■初めから漢字で教へて見た

長い間さう考へてゐた私は、初めて文字といふものを学習する一年生に対して、初めから社会で使はれてゐる表記で教へて行きました。それですから、

えんそく
あるけ、
あるけ、
げんきにあるけ。

といふ文章は、

遠　足
歩け、
歩け、
元気に歩け。

といふ表記に改めて教へたわけです・“遠足”といふ表記で学習させますと、やがて“足”や“遠い”といふ表記を学習することにより“遠足”といふ言葉の真義がひとりでに理解できるやうになります。勿論（もちろん）、初めから「遠は“遠い”、足は“あし”で、遠い所へ足を使って行くこと」といふ説明をすることも出来ます。これは“えんそく”といふ表記で

はとても出来ません。

さて、このやうに漢字かな混り文に改めたものを読ませますと、初めからとても一年生とは思へないやうな実に見事な読み方をします。それは一語一語を瞬間的に目で読み取った上で読むので、速くすらすらと読めるのだらうと思はれました。

そのうちに意外な事に気が付きました。“け”や“に”といふかな文字だけを取り出して読ませてみますと、読めない子供がゐるのです。そこで、一学期の終りに、学習させた漢字やかなの読み方調査をしてみました。すると、漢字はよく読めるのに、かなは殆ど読めない、といふ子供が何人もゐたのです。

然し、この子供たちも、文章を読ませてみますと、実にすらすらと読むのです。それは読める漢字を頼りにして読めないかなを適当に読んでゐるのに違ひない、と思はれました。つまり、“漢字さへ読めれば、かなは読めなくても、文章は読めるものだ”といふことです。我々が新聞を読む時にしてゐる事を、一年生でもしてゐるといふわけです。

然し、かなも一字一字読めるやうにしなければいけないと思ひ、この子供たちを放課後に居残らせ、かなの特訓をしてやりました。けれども一向に効果が現れないので、中止してしまひました。結局はそれが良かったのです。三学期を終る頃には、すべてのかなが立派に読み書き出来るやうになってゐました。

かなの学習は全く抽象的な音声と特徴の少ない字形を結び着ける事ですが、これが実に結び着き難く、それで非常に覚え難いものなのです。だから、特訓した所でなかなか覚えられるものでは無いのです。それよりも、長い目で見てやって、「ひとりでに覚えるまで気長に待ってやる」といふ態度が大切です。特別に努力して学習しなくても、一年といふ年月の間には、かなはひとりでに覚えられるものである、といふ事が判

りました。

■書ける漢字を作文でなぜ使はない

私が指導主事を務めてゐた時、小学校の先生方から相談されたことが多かった事の第一に、「学習した漢字が、テストでは書けるやうになってゐるのに、作文にはそれをかな書きするのです。なぜでせうか」といふ問題がありました。

これに対しては、「テストで書けたと言っても、十分に習熟してゐない為に作文に使ふことが出来ないのでは無いか」といふ考へ方と、「漢字は画数が多くて書くのが面倒なので、書き易いかなを使ふのでは無いか」といふ考へがありましたが、事実はどちらも間違ってゐました。

一年生の最初から漢字表記で学習した子供たちは、どんな言葉でも必ず漢字で書かうとしました。例へば、書けない漢字がありますと、先生に尋ねて教へて貰ふか、自分で調べるかして必ず漢字で書き、決してかなで書くことをしませんでした。だから、「学習した漢字が作文に使はれない」といふ先生方の悩みなど誇張だったのでは無いか、と思ふやうになりました。

所が、それから三年後、昭和三十一年に担任した一年生に対しては、文部省の指導要領に従って指導することにし、かな表記の言葉はかな表記のままに学習させました。すると、かういふ学習過程の中で漢字学習をした子供たちは、確かにテストすれば書ける漢字を、作文には使はないでかな書きすることが解りました。

それで、「学習した漢字は必ず使って書かなければいけない」と言って注意したのですが、いくら注意しても一向に改まりませんでした。この体験を通して、「学習した

漢字が作文には使はれないので困る」といふ先生方の悩みが、決して誇張では無かったことを知ることが出来ました。

■大きな違ひ

最初から漢字で学習させますと、その言葉は漢字と連合し、一体となって記憶されますので、その言葉を表記しようとする時には、その言葉と一体となって記憶されてゐる漢字が自然と頭の中から出て来るので、それでかなで書くことが無いのだと思はれます。

だから、頭の中で言葉と一体となってゐる漢字が頭の中から出て来ない場合でも、必ず先生に教へて貰ふか、自分で調べるかして漢字で書かうとしたのでせう。かなで書いたのではその言葉を書いたとは思へないのだと思はれます。

これに対して、最初かな表記で学習した子供たちにとっては、「先入、主となる」の道理で、言葉がかなと連合して、後から学習した漢字はその蔭に隠れてしまひ、なかなか出て来ないのだと思はれます。

つまり、「漢字は画数が複雑で書くのが煩（わずら）はしいから使はない」といふやうな意識的なものでは無くて、かな先習に依る習慣の所為（せい）であり、無意識的な行為のやうに思はれます。だから、矯正（きょうせい）することが困難なのであって、それで先生たちが悩むわけです。

更に困った事には、「書ける漢字を作文に使はない」といふ事は、「書ける漢字でも、長く使はないでゐる為に忘れてしまひ、本当に書けなくなってしまふ」といふ結果をもたらすことです。

実はこれが「漢字学習に先生も子供たちも大変な努力をしてゐるのにも拘(かかわ)らず、なかなか力が付かない」一番の理由では無いか、と私には思はれるのです。これは、書き取りテストに依る練習などで解決できるやうなものでは無いと思ひます。

最初から漢字表記で学習させて置きさへすれば、譬(たと)へその漢字を忘れて書けない場合でも、決してかな書きで済ませようと思はず、必ず教はるなり調べるなりして漢字で書かうと努めます。この態度が大切なのです。それは、今は書けなくても必ず書けるやうになるからです。

これは「今は書けても、使はない為に忘れてしまって書けなくなる」かな先習の子供たちに比べてみますと、大変な違ひであることが判ります。だから、「最初から漢字で教へる」といふ事が肝腎(かんじん)なのです。

■かな先習の諸弊害

かな先習に依る弊害はまだまだ沢山あります。例へば、小学校低学年の指導で先生方が悩まされる問題に、次のやうなものがあります。

(一)漢字に不要なかなを付け加へる誤り。

※例＝川わ、月き、雨め。

(二)漢字を表音文字のやうに使ふ誤り。

※例＝木しゃ(汽車)が木(来)た。

このやうな誤った使ひ方は、最初から漢字表記で学習した子供たちは決して犯す

ものではありません。然しながら、最初かな表記で学習する子供たちにとっては、これは実に犯し易い誤りであって、その上、矯正しようと努力してもなかなか正すことが出来ないものです。

かな表記は一音一字が原則ですから、すべての言葉を一音一字といふ形で表記する習慣が身に着いてしまふものですから、“川”だけでは「川のか」だけにしか当らないやうな気がして、“川わ”と書かないと心が落着かないのでは無いかと思はれます。

これよりももっと困るのが「木しゃが木ました」と書く誤りです。これは「漢字の表意性をよく説明してやって理解させれば改まるはずである」と思はれるでせうが、事はそれほど簡単なものではないのです。

例へば、「積木の汽車」を「つみ木の木しゃ」と書いた子供がゐたとしませう。その子に対して「“つみ木”は正しいが、“木しゃ”は誤りである」といふ事を、どう説明したら子供に納得させることが出来るでせう。

“つみ木”が正しいなら、“木しゃ”だって正しい、と考へるのが自然です。最初から“汽車”と教へさへすれば問題は起らないのです。さうすれば、汽は蒸気を表した字で、蒸気で走る車だから“汽車”と書く。“木車”は誤りだと直に理解できます。然し、“汽”といふ字を学習してゐない子供にはとても理解させることは出来ません。

また、“学校”といふ漢字を学習した子供たちは、校舎を“校しゃ”と書き、講堂を“校どう”と書くに違ひありません。その場合「“校しゃ”は正しいが、“校どう”は誤りである」といふ事を、どう説明してやったら子供に納得させてやることが出来るでせう。

これも最初“講堂”と教へて置けば、何の問題も起らないのです。“講堂”を知らない子供が“学校”を学習すれば、“校どう”と書くのは自然の道理です。これを誤りとし

たら、“校”と書くべき所でも“こう”と書くやうになってしまふでせう。

このやうに、教師にとっては説明することが出来ず、子供にとっては実に理解し難い誤りが続々と出て来るのですから、教師も子供もたまったものではありません。また、このやうな学習が楽しいはずが無く、全く無益の学習といふ外はありません。

■最初から漢字表記で学習させよ

私は、先に述べましたやうに、「最初から漢字表記で学習させる」やり方と、「初めは総てかな表記で学習させる」やり方と、その両方を、前者は昭和二十八年より三年間、後者は昭和三十一年より二年間実践し、その両方から生ずる子供たちの反応の違ひを、つぶさに観察し調査して居りますから、この両者についての得失は明確に把握してゐるつもりです。

だから、ここに確信を以て「社会で漢字表記をしてゐる言葉は、最初から漢字表記で学習させなければいけない」といふ事を断言して置きたいと思ひます。これは石井方式の基本原則ですが、昭和四十三年以来、幼稚園の三歳児からこの原則を適用して見事に成功してゐますので、一年生に適用するのに恐れることは全くありません。

一年生から“校舎”“講堂”の校と講の違ひを教へるのでは大変だ、と思はれるかも知れません。然し、大抵は素直にそのまま受け容れ、やがていつとも無く自然に正しい理解へと進んで行くものです。だから、子供の方から質問されない限り、校と講との違ひを教へてやる必要は無いのです。

勿論、質問されたら、説明してやるべきです。“校舎”と“講堂”といふ表記を目にしてゐるのですから、漢字に従って説明してやれば、一年生はおろか三歳児でも納得し

てくれます。一年生や幼児の言語や漢字に関する能力の高さを、教育者の多くは見落してゐるやうです。その能力は大人よりもずっと高いのです。ではその証拠をお見せしませう。

■幼児の有つ驚異的な能力

言葉の学習では、三歳から四歳にかけての時期を“成熟期”と呼んでゐます。一歳半頃までは「ウンマ」とか「マンマ」とか片言（かたこと）しか言へなかったものが、それから二年後には「約二千ほどの言葉を理解し、それを正しい語法に従って使ふ」やうになります。

どんなに教育熱心な親でも、二千もの言葉を教へてやれる親はまづゐないでせう。幼児は周囲で語られてゐる言葉を耳にしてゐるうちに、ひとりでにこれを理解し覚えて行くのであって、決して幼児が「言葉を覚えよう」と意志し、努力して覚えるのではありません。

特に驚くべき事には、動詞・形容詞などの活用を正しく使ひ分け、テニヲハも立派に使ひ分けるやうになる事です。これも決して親から教へられたものではありません。誰からも全く教へられずに、「三歳児は、未然形を使ふべき所では必ず未然形を使ひ、連用形を使ふべき所では必ず連用形を使ふことが出来るやうになる」のです。

このやりな幼児の有つ、正に驚具に値ひする能力を、教育者たちは見落してゐるのです。大人だったら、外国人によく見られるやうに「私、学校、行くません」といふやうに、何年間も掛けて日本語を学習したのにも拘らず、テニヲハも使へず、活用も正しく使ひ分けることが出来ないのが普通です。

また、私など中学校以来学校英語を十一年間も学習しましたが、全く実際の用に

立ちません。幼児だったら、一年も経たぬうちに英米人と全く同じやうな英語を話し聴く能力を身に着けるでせう。グレン・ドーマン博士は、この幼児の能力を「どんなに偉大なノーベル賞学者だってとても太刀打ち出来ない」と述べてゐますが、私も同感です。

■漢字を覚える能力は年ごとに低下する

私は、昭和三十五年に担任した一年生を、卒業するまで六年間に亘って担任しました。私はこの子供たちにも「社会で漢字表記をしてゐる言葉は総て漢字で表記し、決してかな書きしない」といふ石井方式の基本原則に従って指導しましたから、一年生が一番数多くの漢字を学習し、学年が進むにつれてその数が減って行きました。

六年生の学習漢字は、一年生の時の三分の一にも足りない程なのに、その習得に苦しんでゐました。同じ子供たちを六年間通して指導してみて、漢字を覚える能力は一年生の時が最も高く、その能力は年ごとに低下して行くことをはっきりと観(み)て取りました。

丁度その頃、大脳生理学で有名な時実利彦先生とお話をする機会があり、この話を申上げた所、「丸暗記する能力は、生後の三年間が最も高くて、三歳を過ぎたら低下する一方だと言へると思ひます。だから、漢字の学習においてもさういふ結果になるのは、私も当然だと思ひます」といふ事でした。

一年生が六年生と馳(か)けっこしたら、一年生が負けるに決ってゐます。また、一年生が六年生と角力(すもう)をしたら、やはり一年生が負けるに決ってゐます。

だから、「何を競争したって、一年生は六年生に負けるに決ってゐる」と、誰だってさ

う思ふに違ひありません。私もさう思ってゐました。それで、漢字を覚える能力も、一年生が一番低く、その能力は学年が進むにつれて高くなる、と思ってゐました。所が、事実はその正反対でした。

この事実の体験に依り、「教育の基本に関（かかわ）る重大な問題を、ただ感覚だけに頼って判断し決定する事は実に危険である」といふ事を深く痛感しました。判り切ったと思ふ事でも実践し検証する必要があるのです。

私はこの事実を発見すると、直（ぢ）に世に発表して、一目も早くこの事実に沿った漢字教育をするやうにと呼び掛けました。然し、何の反応もありませんでした。教育界の反応の鈍いことについては、十分に体験済みでしたから落胆はしませんでした。

然し、能力の高い時に負担が軽くて、能力が低下するにつれて負担が重くなる漢字教育を受けてゐる子供たちの事を思ふと、暗然たる気持にならざるを得ませんでした。

こんな見当違ひの漢字教育を続けてゐる限り、教科書が満足に読めない子供が多く出るのは当り前です。教科書が満足に読めなくて楽しい学習が出来るわけはありません。そこから登校拒否する子や非行少年少女が生れるのです。

半ば諦めてゐました所、“初めに”で述べましたやうに、平成四年度から施行されることになった新指導要領で、今まで高学年に配当されてゐた漢字が大幅に低学年に移されました。その結果、三年生・四年生に最も多くの漢字が配当され、五年・六年と逐次配当漢字が減ってゐます。まだまだとても十分な配当とは言へませんが、これでいくらか「能力の低下につれて負担が軽くなった」ことにはなります。

文部省のする事ですから、そんなに大きな変革は望めません。今度の改訂の範囲が精一杯の変革だと思ひます。だから、まだまだ不十分だと思ふ一方で、「よくぞここ

まで改訂してくれた」と文部省に感謝したい気持があります。

■漢字の強制学習は無益！

そもそも幼児が、四歳頃までの間に二千もの言葉を理解し覚えるのは、親に教へられて覚えるのでは無くて、幼児がひとりでに周囲から吸収して行ったものである、とは既に述べた所です。

この「親に教へられないで、幼児がひとりでに覚える」といふ事が、結果的に非常に良いのです。もしも学校で行ってゐるやうに、幼児が親から一語一語教へられて、直にこれを使ふやうに求められたとしたら、いかに記憶力の強い幼児でも悲鳴を上げるに違ひありません。

言葉が早く正しく使へるやうになる事を我が子に望まない親はありません。それでも、無理に教へることをせず、ひとりでに覚えるのを待ってゐるから良いのです。漢字の学習もさうしたら良いのです。

私は、一年生に漢字を教へるのに当って、さう考へました。だから、一年生に対して年間六百字程の漢字を提出しましたが、これらの漢字をひとりでに覚えるのに任せて、決して早く覚えることは求めませんでした。

「一年生で学習しても、卒業するまでの間に覚えてくれたらそれで十分だ」といふ気持で漢字を提出して行ったのですが、結果は、一年間に平均五百字程の漢字が読め、四百字程の漢字が書けるやうになってゐました。大よそ学習漢字の八〇パーセントが読めるやうになり、その読める漢字の八〇パーセントが書けるやうになるものかと思ひました。

毎日よく何字かの漢字を提示して、その漢字の書き取りテストをするから家でよく練習して来なさい、と言ふ教師があります。然し、かういふ学習で覚えた漢字は身に着かないのが普通です。

記憶には「一時的記憶」と「永久的記憶」とあります。ひとりでに覚えた記憶は「永久的記憶」になり、覚えようと努力して覚えた記憶が「一時的記憶」になるやうです。

世界的な数学者として有名な岡潔先生は、「大学時代、試験の前日に一回目を通すだけで全部記憶でき、翌日の試験でそれが完璧に書けた。然し、書き終って教室を出る頃にはその記憶は完全に消失してゐた」と語ってゐらっしゃいますが、この記憶が典型的な「一時的記憶」です。

「一時的記憶」は目的を有ってゐるのが普通です。岡先生の例で言ひますと、「明日の試験」です。一時的記憶は、目的を果せば必要が無い記憶ですから、岡先生のやうに早く忘れる人ほど「頭の働きが良い」といふ事になります。

だから、試験の為に覚えた記憶は、晩(おそ)かれ早かれ忘れてしまふのが普通です。学校で学習した知識が頭に残ってゐる人が少ないのは試験の為に覚えたものが多いからです。もしも試験の為に覚えた知識が何十年も残ってゐるやうでしたら、それは余程「頭の働きが悪い」人といふ事になります。

さういふ理由で、テストの為の漢字練習は無益ですから、ぜひ課さないで下さい。その代り、先生がどしどしと多くの漢字を使って見せ、それを子供たちがひとりでに覚えるのに任せるのです。

■漢字は書けなくても読めれば好い

文字の学習は、明治以来、「読み書き同時教育」で進められて来ました。然し、読むことは容易に出来るやうになりますが、書くことは容易に出来るものではありません。だから、読みと書きとを同時に求めるのは、そもそも無理といふものです。

学習したばかりの漢字は、読めてもその字形は大まかな印象に過ぎません。それを書かせるのですから、一点一画ごとに手本の字と見比べながら書かなければなりません。このやうな学習では、時間ばかり掛って、効果はその割に挙りません。

それよりも、書かせるだけの時間を、反復して読む学習に代へた方が有効です。読む学習を重ねてゐれば、漢字の字形が自然と頭の中に鮮明になって行きますから、さうなってから書く学習に移れば、僅(わず)かの練習で容易に美しく正しく書けるやうになります。

自転車を子供に与へて、「即刻乗れるやうにしなさい」と言はれたって出来るものではありませんが、自転車を与へて放って置いたら、誰だっていつとも無しに乗れるやうになってゐるでせう。

漢字だって同じ事です。「明日までに出来るやうにしなさい」と言ふからいけないのです。沢山の漢字を使へるだけ使って見せて、子供たちがそれをひとりでに覚えるのを待ってゐれば好いのです。子供たちが「覚えよう」といふ気も無しにひとりでに覚えるのに任せて置けば好いのです。

早く覚えることを子供に求めますと、子供はきっと漢字嫌ひになります。子供は嫌ひなものは必ず拒否します。さうなったら失敗です。早く覚える必要などありません。「卒業するまでの間に覚えてくれたら結構」といふ気持でゐれば好いのです。

私たちの日常生活には、文字を読む機会は限りも無いほど沢山ありますが、書く機会は極めて少ないものです。電気製品一つ購入しても、説明書を読んでそれを理解しない事には、危険で使ふことも出来ません。

このやうに、現代の生活では読む必要度は非常に高いですけれども、文字を書くといふ機会は極めて稀ですから、「読める漢字は皆書けなければいけない」といふ、今の漢字教育の在り方は誤ってゐる、と言はざるを得ません。

これからは、益々ワープロが普及して、漢字を手書きするのは、自分の住所、氏名位になりさうです。最近、機械に向って話せば、それが漢字かな混り文になって出て来る、といふ機械も出来たと聞いてゐます。

かういふ時代に、漢字の一点一画をひどく喧(やかま)しく言ったり、筆順を極端に厳しく言ったりして、徒(いたず)らに子供を苦しめるのは、時代錯誤と言ふしかありません。漢字は読むことが基本です。そして、読めさへすれば生活上は事足りるのです。読めないと、生活上困ることが毎日沢山出て来るでせうが、書けなければ困るといふ事はまづ無いと思ひます。もし有ったとしたら、辞書で調べれば済みます。

■無意味な筆順指導

書き方の指導は、教師が「漢字は書けなくても好いのだ」と悟れば、あとはうまく行くものです。筆順にしてもさうです。

そもそも筆順とは、文字を書くのに、最も素直に書ける「書き方の順序」のことです。その基本は、「上から下に向って書く」「左から右に向って書く」(左効きはこの反対)の二つです。

この事は、子供たちに口で教へるよりも、「上から下へ」「下から上へ」「左から右へ」「右から左へ」といふやうに交互に繰返して書かせることに依り、その際の運筆感覚を子供自身の体験に訴へて、子供に判断させることです。

かうして、「上から下へ」「左から右へ」といふ運筆が書き易いといふ事を子供が自得できたら、個々の漢字の筆順については、一字一字教へてやらなくても、子供たちに考へさせれば大抵出来るものです。

私は、個々の漢字について筆順を教へたことは有りません。子供に考へさせました。文字に依っては、子供に考へさせた上でこれを発表させました。大抵正しく書きます。誤ってゐた場合でも、再考させますときっと正しい筆順を書きます。

筆順は、教師が「この字はかういふ順序に書かなければいけない」と言って教へるから却て難しく感じられ、不愉快なものになるのです。そもそも子供の頭で解決できるものは教へてやるべきではありません。子供が頭を使はなくなる恐れがあります。

文部省の『筆順指導の手引』の“まえがき”に「筆順には、正しい筆順も無く、誤った筆順も無い」とあります。筆順はさういふ性格のものですから、「かういふ順序で書きなさい」と言って強制すべきものではありません。

そもそも筆順の手引きは、教師の要請で、文部省が心ならずも編集し刊行したものだと聞いてゐます。言はば「教師がとんでもない書き方をしないやうに」教師の為に制作されたものです。だから、“まえがき”に、「いく通りもの筆順があるものでも、ここにはただ一つしか示してゐない」と書かれてゐます。

所が、何でも金科玉条にしたがる教師が、いく通りもの筆順がある漢字を、手引きに示された筆順だけを強制するばかりか、他の筆順を誤りとするものですから、文部省でもたまりかねて度々さういふ事の無いやうにといふ指示を出してゐます。

それでも一向に改まる様子が無いので、文部省も手引きを廃刊してしまひました。然し、廃刊された今でも、各学校にはこの本が残ってゐますので、相変ず子供たちを苦しめ、またその親までも苦しめてゐます。

「親までも苦しめてゐる」といふわけは、例へば、子供が親に「上といふ字の筆順を教へて」と尋ねますと、親は大抵自分が書いてゐる「上 上 上 上」といふ筆順を教へるでせう。所が、手引きの筆順は「上 上 上 上」となってゐますから、子供は学校で×を貰って親を恨む、といふ事になるからです。

これは大変に困った事です。昔から、このやうな教育の大半は家庭で行はれてゐました。だから、これが出来なくなった今、学力低下が叫ばれるのは当然の事だと言へませう。

「上 上 上 上」といふ筆順は、昔から行はれてゐる極めて常識的な筆順です。だから、手引きでも“まえがき”にこの筆順などを例に挙げて、「手引きに示されてゐないこのやうな筆頭をも認めなければいけない」と断り書きしてゐるのです。

といふ事は、現在、大抵の学校で行はれてゐる「手引きに示されてゐる筆順だけが正しいとする筆順指導は、手引きに違反した指導である」といふ事になります。だから、漢字の筆順テストをする事など言語道断の行為だと言ふべきです。

■書き方が上手になる秘訣――讃める教育――

私が担任した学級の子供たちは皆、他の学級の先生方が驚嘆してくれるほど美しい字を書きました。さうなった理由は、次の二つだと思ひます。

一つは、書き方の手本の上にトレースペーパーを載せて写し書きをさせた事です。こ

れは形の好い字が楽々と書け、然も、手本の字からかなりはみ出した場合でも、手本の上から外して見ればそれが見えなくなり、「我ながら好く書けた」と思へる為に、子供たちは喜んで書きます。それこそ何枚書いても飽きる事を知りません。だから、自然と上達するのだと思ひます。

次は、子供たちの書いた作品は、決して直さない事です。そして、〇(まる)の大安売りをする事です。「とても良く書けました」とか「前よりとても良くなりました」とか、子供を喜ばせる言葉を書いてやる事です。さうすれば、子供たちは家でも一所懸命に練習して来て、それを提出してくれます。

書き方は、子供たちが意欲的に練習しさへすれば、何の指導をしてやらなくても必ず上達して止まないものです。どんなに下手な子供でも、沢山書けば必ず上手になります。だから、子供に意欲的な練習をうんとやって貰ふ事が何よりも大切です。

だから、どんなに下手な字でも、私は決して直さないのです。直されると誰だって不愉快になるに決ってゐます。不愉快な気持では意欲的な練習は出来ません。下手な字でも、「良く書けました」と讃(ほ)めてやった方が、直してやるよりも効めがあります。

子供は、自分が書いた字のどこが悪いのかは、書いてゐる時点で既に判ってゐるものです。それが判らない子供はゐません。直してやらなければ判らない、といふものでは無いのです。だから、直してやる必要は無いのです。

直してやって子供の気分を悪くさせたら、意欲的な練習が出来るわけが有りません。それよりも「前より良くなりました(前より悪くなる事はまづありません)」と書いてやって気分を好くさせてやった方が必ず良い結果が出ます。

どうも教育熱心な先生ほど、骨折って子供の字を直してやり、子供の意欲を削(そ)ぐことに努力してゐるやうに思へてなりません。子供は意気込んで書くやうで無いと、決

して上達しません。それには讃めてやって好い気分にさせてやる事が一番です。

もっとも、既に上達してゐる子供や、意志の強い子供の場合には、悪い所を見付けて教へてやることは有効です。弱い火は、風を受けると熱を奪はれて消えてしまひますが、強い火は、風を受けると益々火力を強めます。子供もそれと同じで、悪い点を直されると悄気てしまふ子供もゐれば、その反対に奮起する子供もゐます。

ただ、既に上達してゐる子供や、意志の強い子供は、先生が悪い所を見付けて教へてやらなくても、自分で反省して悪い点を直し、向上して行くだけの力を備へてゐますから、特に悪い所を見付け出して教へてやる必要も無いと思ひます。それで、総じて「骨折って子供の字を直してやるよりも、よく書けましたと言って讃めてやる方が好い」といふわけです。

■国語学習は“読み”が基本

私どもの子供の頃には“国語”といふ学科名は使はれないで“読み方”といふ名前が使はれてゐました。それで、国語の教科書も、“読本”と呼ばれてゐました。“読み方”の時間は毎日ありましたが、その外に、週に一、二時間の“書き方”“綴り方”といふ名前の時間がありました。

これが敗戦に因り、一括されて“国語”と改められ、その内容はアメリカに倣って“聴く”“話す”“読む”“書く”の四領域に分けられ、特に“聴く”“話す”教育が重視されるやうに変りました。

アメリカは多民族から成立ってゐる国ですから、英語の話せない児童生徒がかなりゐます。ところが、英語を聴き、話す能力が十分に無いと、学習を進めて行くことが

出来ません。それで、アメリカでは“聴く”“話す”学習に特に力を入れてゐるわけです。これは当然の事です。

然し、日本は事情が全く違ひます。先生の話す言葉が理解できない子供などゐません。だから、“聴く”“話す”学習を重視する意味が無いのです。それに、“聴く”力も“話す”力も、基本的には“読む”学習に依って養はれるものです。読む学習で読解力をつけ語彙（ごいりょく）力を増すことが、そのまま聴く力になり、話す力を育てることになるのです。だから、戦前の読み方中心の学習が正しかったのです。

読解力や語彙力は、算数・理科・社会科等総ての教科学習の基礎能力でもあります。だから、欧米の殆どが、一・二・三年生においては、全学習の時間数の半分、もしくはそれ以上の時間を国語科の学習に充（あ）ててゐます。戦前の日本はやはりさうでした。

語彙力や読解力が不十分なうちから理科や社会科などの学習をしても、効率が悪いのは当然です。だから、いづれの国においても、低学年の間に語彙力や読解力を出来るだけ高めるやう、全学習の半分、もしくはそれ以上の時間を国語科の学習に充ててゐるのです。

戦前の日本では、理科は四年生から、社会科は五年生から始めてゐました。ヨーロッパの諸国やアメリカの大半は、今でもやはりさうです。それで私は、かな書きされてゐる理科や社会科の用語を漢字表記に改めて、理科や社会科の学習の中で、語彙力、延（ひ）いては読解力を高める為の工夫と努力をしました。

かな表記では解り難い用語でも、これを漢字表記に改めますと解り易くなりますので、理科や社会科の学習においても、その用語を漢字表記に改めるだけの事で、学習の効率が大層好くなりました。理科とか社会科とかと言っても、その学習の基本は

教科書の読解にあるのですから、それは当然の事だと思ひます。

■算数の文章題は読解力で決まる

最初担任した一年生(昭和二十八年)に対しては、理科、社会科ばかりではなく、総ての教科用語を漢字表記に改めて教へました。それも、算数の“まる”“さんかく”“しかく”といふ用語を“円”“三角形”“四辺形”といふ高学年で使ふ用語を使って教へました。かうして教へますと、“角”や“辺”などの意味を理解することに依って、用語の理解が深く正確なものになります。

指導主事をしてゐた頃、先生方から「計算はよく出来るんですが、文章題は出来なくて困ります」といふ嘆きの声を聞きました。然し、私が一年生を担任してみますと、皆、文章題を喜んでやり、また、実によく出来ました。それで、「文章題がよく出来ない」といふ先生方の嘆きを疑問に思ふやうになりました。

所が、その三年後、一年生に対してかな表記のままで文章題をやらせますと、確かに文章題の出来が悪いのです。その上、子供たちも前の一年生のやうには文章題を喜びませんでした。それで、かなばかりで書かれた文章は読み難く、従って文章が解り難いので、何を問はれてゐるかが解らないので式が立てられないのだ、といふ事が判りました。

つまり、算数の文章題といふものは、文章を読んで式を立てるまでの仕事は国語科の読解に当ることをしてゐるのです。だから「計算は得意だが、文章題は苦手だ」といふ事は「算数の計算力はあるけれども、国語の読解力が弱い」といふ事なのです。

■国語に読解指導は要らない

「算数の文章題は、かなばかりで書かれたものは出来が悪いけれども、漢字を沢山使ったものは出来が良い」といふ事から、私は、「国語の読解指導といふ事は、かなばかりの文章を与へた為に起った現象ではないだらうか」といふ疑問を懐くやうになりました。

普通の一年生の本を読む様子を見てゐますと、「かなを一字一字拾って読む」といふ通弊（つうへい）のあることが判ります。これは、かなが表音文字である所から生ずる、避け難い欠点だと思はれます。

このやうに文字を一字一字拾って読みますと、当然、全体としてのまとまりが把握でき難くなりますが、それよりも、このやうな読み方をする子供たちは、“読む”ことを、意味に関係なく一字一字“発音”することのやうに考へてゐる節があるやうです。

大人でもさうですが、とりわけ一年生たちにとっては、「本の文字を声に出して読むこと」それ自体が快く楽しいのです。本の内容を汲取ってそれを楽しむのではなくて、文字を声に出して言ふことを楽しんでゐるのです。

だから、文章を読むといふことでも、目に入った文字を一字一字声に出して言ふだけであって、内容を汲取らうとしない事が多いのです。それで、“読解指導”をする必要が生じたのだと思ふわけです。

一年生でも、最初から漢字で表記した文章で学習させますと、同じ発音の言葉でも意味が違ってゐるものは、例へば「歯と葉」「花と鼻」といふやうに、異った文字で書き表されてゐるものですから、初めから自然と意味を汲取ることを目指す読み方をす

るやうになります。

それで、文意が汲取れない場合には、文意が汲取れるまで、何回でも繰返して読むのです。ここが、最初から漢字かな混り文で学習した子供たちと、かな先習の子供たちとが違ふ所であって、この子供たちにとっては、“読む”ことがそのまま“読解”そのものになるのです。

最初から漢字かな混り文で総ての文章を学習して来た一年生の子供たちが、算数の文章題を実によく解き、「文章題の方が計算問題よりもおもしろい」と言ってゐたのには、その根柢にさういふ理由があったのだと思ひます。

このやうに、子供に与へる文章を総て最初から漢字かな混り文で学習させてゐますと、一年生は自然と読解を求める読み方をするものですから、殊更“読解指導”をしてやる必要は無い、と私は考へてゐます。いや、必要が無い所か、どんなに見事な読解指導であってもそれは“蛇足”でしかない、と私は思ってゐます。

昔から「読書百遍、意自ら通ず」と言はれてゐて、教へられて理解するよりも、何回も繰返して読むことにより、自然と理解に到達する事の方が重んぜられてゐました。それが本当の“読解”といふものではないでせうか。凡そ読書といふものは、その人の能力に応じて読解すればよいものだと思ひます。

■複雑な漢字ほど覚え易い

意外に思はれるでせうが、漢字は字形が複雑なものほど覚え易く、覚えたら忘れ難いものなのです。それは記憶の手掛りが多いからです。人の顔だって、複雑な顔の人ほどよく記憶に残ってゐるではありませんか。だから、“書く”ことを教へない、幼児期

の漢字教育は、“蟻”とか“鳩”とかという、字形の複雑な漢字を選んで教へてやると、直に覚えてくれます。

また、内容の面から言ひますと、具体的なイメージが直に頭に浮ぶやうな漢字が覚え易いのです。先の“蟻”や“鳩”といふ漢字は、その意味でも覚え易い漢字だといふ事が出来ます。

これに反して、字形が単純で、内容が抽象的な漢字ですと、覚え易さうで実は覚え難いものです。例へば、“七”とか“八”とかといふ漢字は、直に覚えられさうに思はれますが、幼児はなかなか覚えてくれません。かういふ漢字には、イメージ作りが出来ない上にその内容と字形とを結び着けるものが全く無いからです。

さういふ訳で、全く内容を有たない、抽象的な音声しか表してゐないカナは、幼児に取って最も難しい文字なのです。こんな事は、幼児に実験してみれば直に判る事ですが、「漢字は難しいもの」「かなは易しい文字」といふ先入感、それも強い固定観念があるものですから、事実に気が付かないのです。

例へば、脳障害児や精薄児ですと、ひらがなはなかなか覚えられなくても、漢字なら容易に覚えられます。私は、昭和四十九年から五年間、脳障害の少女の漢字教育に関って来ましたが、その少女は一年かかってもひらがなが一字も覚えられなかったのに、漢字学習に切替へましたら、毎日一字づつ、確実に覚える事が出来ました。五年経った時には、私に手紙を書いてくれるまでになりました。

この事については、グリーン・アロー出版社から昭和五十五年十月に刊行しました『親こそ最良の教師』に精(くわ)しく述べてゐますので、関心がお有りの方はそれをお読み下さい。

さて、脳障害の幼児でも漢字は覚えられます。漢字を覚えてこれを読むといふ事は、

頭を正しく良く使ふ事ですから、必ず頭の働きが良くなって行きます。人間の体は、頭は勿論、手でも脚でも、使へば使ふほど発達するやうに出来てゐます。また、人間は、頭でも手でも脚でも使ひたくてたまらないやうに作られてゐます。

脳障害の子供でも同じです。ただ、能力が低い為に、能力を越えた使ひ方は出来ないし、またやりたがりません。然し、能力に見合った学習は喜んでやりますし、また、やりたがってゐます。さういふ事をする時には、目を輝かしてやります。

その事は、ひらがなの学習では目が死んだやうになりますが、漢字の学習では目がきらきらと輝き出すことでよく解ります。

■幼児の能力の伸し方

幼児は、何事につけても好奇心を有ち「これは何？」「どうして？」と疑問を連発します。そんな時、「お母さんは今忙しいの。あとでね」とか、「そんな事は学校で教へてくれるから、今知らなくてもいいの」とかと言って、その疑問をはぐらかしてしまひますと、折角の好奇心が萎(しぼ)んでしまひます。

湯川秀樹博士が幼児時代の想ひ出を書いてゐらっしゃいますが、それに依りますと、よくお母さんに質問したさうです。すると、お母さんはどんなに忙しい仕事をしてゐる時でも、その手を休めてその目を見詰めながら答へてくれた、といふ事です。このやうなお母さんに育てられた事が、湯川博士を偉大にしたのだと思ひます。

どうぞ子供の質問には、どんなに忙しくても、真剣に答へてやってほしいと思ひます。

それも、「ああ、それはとても好い質問よ」と讃めてやりますと、一層効めがあります。子供は質問することは好い事だといふことが解りますから、一層質問するやうになるでせう。

凡そ、能力といふものは、その能力を使ふことによって向上するものですから、子供のやりたいと思ふ事を、どんどんやらせるやうに傍らから励ましてやる事が大切だと思ひます。やってそれが出来ますと、子供は成功感を味ふことが出来ます。これが、やる気を更に起させ、かつ強めるのです。

子供は一つの事に興味を有ちますと、それを繰返し繰返しやって、飽きるといふ事を知らないものです。これが、お母さんに取っては不満のやうですが、これこそ能力向上には最も有効な行為なのです。

学習の“習”といふ字は、「同じ行為を百回繰返す」ことを表した字なのです。同じ行為を百回も繰返さないと、折角習っても習った事が身に着かないのです。つまり、元の木阿弥になってしまって、少しも習はなかったのと同じ結果になってしまふのです。

昔から「読書百遍、意自ら通ず」と言はれてゐますが、「意味が解る」といふ事もさる事ながら、「同じ書物を百回も繰返して読む」といふ事が価値のあることなのです。「同じ本を繰返して読んでも進歩は無い」と思はれるお母さんが多いやうですが、それが幼児期には大切なのだといふ事をよく知って頂きたいと思ひます。

■子供のやる気を大切に

教育で一番大切だと思ふ事は、子供にやる気を起させる事です。それには、子供が望ましい事をやってゐるのを見たら、大袈裟に喜んでみせる事が大切です。「かういふ

事をすると、お母さんはこんなに喜んでくれるのだ」と思ひますから、一層張切ってやるやうになるものです。

だから、子供が良い事をした時には、必ず讃めてやることが大切です。讃められてやる気を出さない子供など絶対にありません。それには、子供の行為には絶えず目を配ってゐる必要があります。

“叱る”ことは、道徳的にいけない事をした時、時に他人に迷惑を及ぼすやうな行為をした時に限って頂きたいと思ひます。この時は決して黙認することなく、叱らなければいけません。もっとも、その前に、道徳的な規範を教へて置かなければなりません。教へないでゐて、いきなり叱るといふ事はいけません。

子供が失敗すると、それを咎めるお母さんがよくゐます。これも子供のやる気を削ぎます。子供は失敗を重ねて初めて成長できるのです。失敗を咎められたら、「君子危きに近寄らず」で、万事に消極的な子供になってしまふ虞れがあります。